

訪問作業療法はこれでいいのか？

特集にあたって

2021 年度（令和 3 年度）に介護報酬・障害福祉サービス等報酬が改定された。今回の改定では、感染対策強化や継続的な自立支援サービス提供体制を基盤に、地域包括ケアシステムの推進強化が謳われている。また、そのサービス提供の必要性や専門職の介入効果もデータ化が進められる。在宅においては、入院期間が短くなり、在宅医療が担う役割は大きくなり、対象者のニーズも多様化するため、多職種で対応していかなければならない。障害・福祉の領域においても、対象者の高齢化への対応が求められている。

これらに对应していくためには、提供する側の体制構築が必要であり、在宅では通いや訪問、入所等のサービス確立がメインとなる。訪問の作業療法は、この時代背景を基にさまざまな制度下に位置づけられ、対象者の幅も広がっている。生活機能をアセスメントし、生活課題を明確にし、具体的な解決策が提示できる OT にとって、訪問という舞台はまさに最適であり、より効果的な力を発揮する。

今回の企画は、この時代背景とこれからを考えたときに、訪問の作業療法の多様性を明らかにし、課題を明確化することで、作業療法がこれからも幅広い分野で役立てるよう発展する機会としたい。また、他職種からの視点でも執筆いただくことで、俯瞰的に訪問の作業療法を考えたい。

（関本充史）

企画担当

関本充史（かなえるリンク、OT）

江藤文夫（国立障害者リハビリテーションセンター、元総長・医師）

香山明美（東北文化学園大学、OT）